都市デザイン研マガジン　vol.47
Urban Design Lab. Magazine
2007.3.25
東京大学都市デザイン（西村・北沢）研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html
編集長　：坂内良明
編集委員：石井宏典　塩澤諒子

修了式・追いコン・卒業旅行

新しいコラボレーションに向けて

Ｍ２　鄭一止（イルジ）

安田講堂前にて/左から、三沢、楊、早坂、鈴木、江口、西原、柴田Ｍ２

修了式

3月22日午前、東大安田講堂にて、Ｍ２・7人が修了式に出席。その後、14号館141教室にて、大方潤一郎・都市工学専攻科長より修了証を授与されて、晴れて修士号を獲得した。女子院生のうち3名は、あでやかな振袖姿で、修了の喜びを露わにした。

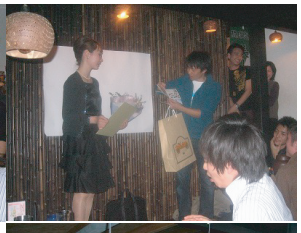
追いコン

追い出しコンパは同日、上野仲町・沖縄料理「SHI-SA　E-SA」で行われた。総勢35人が列席して、修了したＭ２・7人、学部卒業の４年生・３人の門出を祝った。

今年度追いコンの目玉は、修了7人全員に贈られた、秘蔵写真DVD。プロジェクトや、旅行、研究室での日常生活のひとコマひとコマを切り取ったポートレートが満載された一品は、ポンサンM1を中心に編集された労作。両教授、両助手のメッセージ、集合写真などを載せた小粋な歌詞カードが付き、盤面には東京のスカイラインを描いたソフトタッチの絵。M1の結束力が示された労作だった。会場でも一部が上映され、喝采の声は止まなかった。

修了・卒業する人へ贈ることば（要旨）

★人に夢を与える人となってください。（北沢猛教授）
★文化財を、保存してください。（チェスター・リーブス客員教授）
★同志をさがしてください。（野原卓助手）
★ズルしてもまじめに、生きてください。（中島直人助手）
★世界への架け橋となってください。（パリ滞在中の西村幸夫教授からの祝電を野原助手が代読）
★大学に残ることも社会へ出ることの一つ、と心得よ。（五十嵐佳子技官）



左/映像に見入る列席者

右上/プレゼントＤＶＤの解説をする伊藤Ｍ１（当時）。左は江口Ｍ２（当時）

右下/プレゼントのマグカップを手にして柴田Ｍ２、歓呼の乾杯

卒業旅行

text_bannai（楊　恵亘Ｍ２談を編集）

修了したＭ２・６人（江口、鈴木、西原、早坂、三澤、楊）とＭ２一止の計７人は、3月29日～30日、1泊2日で伊豆高原と熱海へ、卒業旅行へ出かけました。

２人が予定の電車に乗り遅れる波瀾の幕開けでしたが、お昼に宿に着いて、ほどなく全員がそろいました。満開の桜に目を楽しませながら、城ヶ崎海岸へ。その後、食材の買出しをして、宿に戻って晩御飯の支度です。寝坊してみんなに背を向けていたように見えた三澤も、得意のピアノを披露してくれて、一安心。お酒が入ったあとはもちろん、朝まで都市デザイン談義、です。

翌朝は、5時半に江口がマレーシアに発ちました。みんなは、韓流ドラマを見て、11時ごろにゆったり出立。熱海へ、電車で向かいました。

海岸に建ちならぶリゾートマンションや、「海岸環境整備事業」看板のパースのすさまじさに息を呑みながら、ビーチでのんびり。思えば、日本に来て初めての海でした。研究に明け暮れていた、から…？。ふふふ。

ビーチから、熱海市登録有形文化財・起雲閣の見学へ。庭園と、大正時代の和洋折衷建築を鑑賞して、行程を終えました。

京浜プロジェクト報告会

伊藤雅人Ｍ２

去る3月28日、横浜市赤レンガ倉庫ホールにてＣＯＥ京浜臨海部再生アクションスタディの最終報告会が行われた。各研究室からのパネル３４枚も展示、北沢教授をコーディネーターに、横浜市経済観光局、都市整備局の職員も含め、3年間京浜臨海部再生を考えてきた研究会メンバーが互いの研究の成果を発表した。研究発表メンバーには野原助手はもちろん、黒瀬武史ＯＢの姿も。自身の修士論文のテーマである海外のＢＦ再生事例について発表、続くラウンドテーブルディスカッションは「ようやくこういう場に立てて嬉しい」と謙虚に口火をきりつつ、堂々と論を戦わせた。

我々京浜チームはといえば前日の資料作りから当日は会場設営・運営のお手伝い。夜はキリンビール工場内のビアレストランにて、報告書作成の前のプチ打ち上げ。またも車のためノンアルコールの野原助手の一年の労をねぎらいつつ、工業地帯の熱い夜は更けていくのであった。

中島助手、花王財団より授賞

博士論文「都市美運動に関する研究」にて

text_bannai

中島直人助手の博士論文「都市美運動に関する研究」が、平成18年度花王芸術・科学財団の奨励賞を受賞したことが、明らかになった。同財団は、1990年に設立されて以来、美術・音楽分野、科学技術分野に対して幅広い助成・支援事業を進めてきた。このほど中島助手が受賞したのは、平成18年度から創始された「美術に関する研究奨励賞」。「美術に関する研究の振興と、若い研究者の育成に貢献すること」を目的として、5名以内に賞を授けている。

条件がつかない「副賞の奨励金50万円」の使途は？との問いには、巧みにことばを濁した中島助手。いずれにせよ、ふみ出した30代の人生計画に、しっかりと組み込んでゆくのだろう。

チーム野原、打ち上げ

text_bannai

年度末の押し詰まった3月31日、飯田橋のタイ料理店で行われた、喜多方・京浜プロジェクト合同打ち上げ、こと、「チーム野原」飲み。野原助手のもとで仕事をこなす一騎当千のプロジェクト猛者たちが、日ごろの苦労をひととき忘れて、喉を潤した。

恒例「野原賞」は、喜多方・京浜両現地への往復に使えようにと、PASMO。各プロジェクト内での推薦、ジャンケンを経て、奥田Ｍ１が獲得した。

野原助手には、一同から感謝の気持ちを込めてビアジョッキが贈呈された

席替実行委に異議あり

text_bannai

先46号で「研究室人口問題への対処を」と訴えた本紙だが、その後の「席替え」が極めて残念な経過をたどったことを、報告しなければならない。3月27日、研究室ＭＬに「席替え実行委員会」からのメールが、晴天の霹靂の如く流された。

本紙の「2・9・10階の、すなわち、全ての学年集団の代表を早急に選出して、話し合いの機会を設けよ」という論とは反して、「席替え実行委員会」（席替実）は３名の（旧）Ｍ２（いずれも博士課程進学予定）から成っていた。委員選出の基準や過程も不透明であり、研究室内諸集団の輻輳する利害関係を調整し得る団体とは言い難かった。メールの内容は、9階に居る（旧）Ｍ１に対して、「2階か、10階か」の二択を迫るものであり、そこでは、博士課程院生の「先住権」は無前提的に温存され、話し合いの余地は与えられていなかった。経過をたどれば、（旧）Ｍ１は全員署名の「陳情」を席替実宛に提出して、「集団移住」を訴えたが、ほぼ無回答。結局、席替実は、個々人の「2階／10階」の回答をもとに振り分けを行い、新Ｍ１が席決めをする4月5日までに、新Ｍ２は全て引越しを完了。所与の空間的制約と、絶対的なタイムリミットの前に、成員一人一人が「痛み」を分かち合わねばならない、という席替実の言い分―その実、「痛み」の分配が不均衡である、ということも含めて―は、みごとなまでに「都市計画」的であった。

（旧）Ｍ１の「甘さ」にも、難があった。「陳情」という下からの物言いは、席替実の権威の容認にこそなれ、意思決定枠組の改変を迫るものとはなりえなかった。先号で本紙が言った「（（旧）Ｍ１が）集団でいることの、研究室にとってのメリット」は、理論構築したのか。

「難しい」と言われる博士課程院生の引越しについて「本当に難しいのか」「どれだけ難しいのか」問いかけ、彼らの先住権の正当性について疑問を呈したのか。その上で、求める席配置について、実現性のあるプランを提示したか。「おとしどころ」としての、複数の段階的なオプションを、用意していたか。

新環境への興奮に全てが「お流れ」になってしまう前に、研究室内意思決定のプロセスについて、いま一度各人が自覚的になるべきだ。何の協議も経ないままに、上位学年が下位学年の主張を、憫笑以て「ワガママ」と切り捨てる、そういうサイクルは、断ち切られねばならない。

編集後記

text _shiozawa

本郷キャンパスのサクラの下でお花見でもしようかと企画していたら結局雨が降って流れてしまいました。でも結局、赤門横に東大グッズショップがあって、そこにあるベンチで細々と夜桜を楽しみながら、数人でコンビニ弁当をつつきました。場所も変わればコンビニ弁当も風流なもんです。